

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2019年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	社会学	研究科	社会学	専攻
研究代表者 (2020年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名		
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年 (学生番号: 18SB001F)		齋藤 公子 印		
指導教員	所属部局・職		氏名		
	社会学部・准教授		小倉 康嗣 印		
自然・人文・社会の別	自然	・	人文	・	(社会)
			個人・共同の別	(個人)	・ 共同 名
研究課題	2010年代後半に〈肺がんIV期〉を生きるとはいかなることか：患者たちの語りから				
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2020年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名		
	社会学研究科・社会学専攻 博士後期課程2年		齋藤 公子		
研究期間	2019 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 170,000円 / (採択金額) 170,000円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

肺がんは予後の厳しいことで知られるが、近年はゲノム医学・免疫医学の進展により、肺がん患者の生存率は向上しつつある。くわえてがん医療の実践も、2007年のがん対策基本法施行により大きく変容した。本研究は、近年のがんや肺がんをめぐるそうした状況に影響された患者たちの経験を検討する質的研究である。

研究協力者は、東京・神奈川を拠点とする肺がん患者会グループOおよび全国の肺がん患者会の連合組織J会に参加する人々である。彼ら彼女らへのインタビューやその活動の参与観察にもとづき、本研究は「肺がん患者たちはなにゆえに集団活動に取り組むのか」という問いの解明に取り組む。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 肺がん } { がん患者 } { 患者会活動 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**背景と目的**

がんは 1981 年以來、日本人の死因第 1 位である。なかでも罹患数の多いがんに分類される肺がんは、とりわけ予後の厳しいことで知られている。国立がん研究センターによれば、2019 年のがん死亡予測数 38 万 300 人のうち、肺がんによるものが第 1 位で 7 万 6,600 人だった。だが近年はゲノム医学・免疫医学の進展により、肺がん患者の生存率は向上している。また日本のがん医療は、2007 年のがん対策基本法施行によっても大きく進展した。がん患者を支援するさまざまな施策も実現し、医療施設におけるピアサポート、サポートグループ、患者サロンなどの集団活動の支援は「がん医療に関する相談支援及び情報提供」の一部として推奨されている。

本研究は、肺がんをめぐるそうした状況の変容に影響された 2010 年代後半における患者たちの経験を検討してきた。とくに、東京・神奈川を拠点とする肺がん患者会グループ O および全国の肺がん患者会の連合組織 J 会に参加する人々を研究協力者とした。かつて A. W. Frank は「実質的にはほぼよくなっているけれども、決して完治したとはみなされない人々」を「寛解者」と称した (Frank 1995=2002)。だが、本研究の協力者たちのほとんどは、心情の上では「完治」を目指しながらも、「寛解」を望むことが難しいと思われる状況にある。本研究では、そうした彼女らの切迫した状況を〈肺がん IV 期〉と呼び、その罹患経験を「〈肺がん IV 期〉を生きること」とした。

そのように位置づけた協力者たちの経験のうち、本研究は、彼女らが患者会などの集団で活動する活動を焦点化した。がん患者たちによる集団活動の研究は、かつてセルフヘルプ・グループを論じる研究者たちによって取り組まれ、その活動が参加者たちに与えるポジティブな影響におもに目を向けていた (橋本・樫田 1999; 小俣 1998; 高橋 1998 ほか)。かたや本研究は、医学の進展の成果を一定程度享受しつつあり、制度的支援も得ることができるようになった 2010 年代後半において「〈肺がん IV 期〉を生きる彼女ら彼女らは、なにゆえに患者会活動に参加するのか」という問いを立て、その解明を目的としている。

方法

本研究の研究代表者は、2016 年よりグループ O と J 会の活動に参加し、その参与観察や参加メンバーへのインタビューを実施してきた。2019 年度は、2019 年 4 月～2020 年 1 月にグループ O および J 会のメンバー 5 名にインタビューを行った。これにより、2017 年以來実施したインタビューの協力者は 18 名となった。また、グループ O が開催した会員向けのおしゃべり会 (2019 年度は 4 月、6 月、7 月、1 月に実施。2 月、3 月は中止) や一般向けのイベント (8 月、10 月、12 月に実施)、J 会が連携する日本肺癌学会の年次学術集会 (12 月、大阪府)、J 会の事務局長が実行委員長を務めた A 県開催のリレー・フォー・ライフ (9 月) など、2019 年度にグループ O や J 会が活動した 14 の機会に参加し、参与観察を行った。

くわえて文献等の調査は、(1) 学術的な先行研究の検討、(2) メディアなどによる報道の検討、(3) グループ O および J 会やそのメンバーたちの発信の検討、に取り組んだ。(1) では、これまでに英語および日本語で公表されたがんについての社会学的研究をおもに検討した。(2) では、とくに受動喫煙問題についてのグループ O や J 会の活動についての報道を追い、データを蓄積した。また (3) では、グループ O のブログや J 会の Facebook における発信だけでなく、個々のメンバーたちがブログや Facebook を通じて行う発信も継続的に追った。

このようにして入手したデータを検討するに際し、本研究はおもにライフストーリー研究の方法を採る。ライフストーリー研究の特徴として挙げられる点は、いくつかある。小倉康嗣によれば、ライフストーリーとは「個人の生 (life) についての口述の物語」であり、ライフストーリー研究は「インタビューによってそれ (ライフストーリー) を聴き取り、人間の経験にアプローチしていく調査研究方法」である。ライフストーリー研究には「個人の生の全体性に接近していこうとする問題意識と視点」があり、個人の生を特定の「要素にばらしたり」、個人を「抽象的・集合的なカテゴリーに還元」したりしない。そこでは個人の生の全体性をその「物語性 (生の経験への主体的な意味づけ) を大切にしながら」理解しようとする中で、「文化や社会をつくりかえていく人間の創造的経緯を見ようとする」努力が払われる (小倉 2013)。

人々の語りに向き合うこうしたライフストーリー研究の方法を用いて、本研究は協力者の語りを検討してきた。とくに医学的な研究の対象となる機会が多い病者の経験は、その研究の目的に沿って「要素にばら」されたり、「抽象的・集合的なカテゴリーに還元」されやすい。だが、個々の病者の経験はその「要素」や「カテゴリー」のみで把握するには多様で、そのありようはさまざま要因の影響を受ける。協力者たちの経験もそうしたものであると理解したうえで、本研究はライフストーリー研究の手法を採用して、彼女ら彼女らの多様な生の全体性に迫ることを目指した。

また参与観察や文献調査の結果は、協力者たちの語りの解釈に必要な叙述に用いられた。がん医学の進展、がん医療の変容や、高額薬剤問題、受動喫煙問題、患者主導治験問題など、近年の肺がん患者たちの経験は、そうした複数の社会的状況にも多大な影響を受けている。協力者たちの語りの解釈には、肺がんをめぐる近年のそうした状況についての知識が欠かせず、本研究はそれが彼女ら彼女らの罹患経験にいかに関与しているかの解明にも取り組んだ。

研究成果の概要 つづき

2019 年度の成果

文献等の調査の成果としては、前節(1)「学術的な先行研究の検討」の結果、研究ノート「社会学はがんをいかに検討してきたか——文献調査」を執筆した(2019年9月、日本保健医療社会学会刊『保健医療社会学論集』に投稿)。(2)「メディアなどによる報道の検討」の成果の一部は、第92回日本社会学会大会での口頭発表「受動喫煙と肺がん患者——彼ら彼女らはいかなる影響を被っているか」に活用した。また、(3)「グループOおよびJ会やそのメンバーたちの発信の検討」の成果の一部は、立教大学社会福祉研究所研究例会での口頭発表「肺がん患者たちの集団はいかなる活動を展開しているか——『アドボカシー活動』を中心として」に活用した。

また、J会事務局長Bさんが実行委員長を務めたA県開催リレー・フォー・ライフの参与観察と、Bさんへのインタビューにもとづき、論文を執筆した。原著論文「がん患者は集団活動にいかに取り組んでいるか——A県の肺がん患者会を率いるBさんの語りから」(2020年3月、『保健医療社会学論集』に投稿)は、A県でがん患者たちによる複数の集団活動に取り組むBさんの活動の様態を記述しつつ、その背後にBさんのいかなる肺がんの罹患経験があるかを検討し、Bさんはなにゆえに集団活動に取り組むかを探るライフストーリー研究である。

この論文の執筆の際には、「医療をめぐる社会運動」を論じる研究群を参照した。本郷正武は「医療をめぐる社会運動」を「病を個人的な事象として回収するのではなく、政治的・社会的な問題として広く世に問う試み」と捉え、現代の社会運動が「常に可視的で、文字通り社会運動として出現するとは限らないこと」を指摘した。また本郷は、乳がんの早期発見・治療を呼びかける「ピンクリボンキャンペーン」を「社会運動の萌芽」を持つものと位置づけ、「ごく個人的な病気に過ぎなかった」乳がんを「社会に向けて問うべき『問題』として捉える」その姿勢を社会運動の特徴の一と位置づけた(本郷2010)。

一方、Bさんの経験における「社会運動」の特徴は、それとは異なったものであった。Bさんの活動は、「ピンクリボンキャンペーン」のようにがんの早期発見・治療を呼びかけるのではなく、「AA」のように参加者に「自己変革」を迫るものでもない。Bさんはがんと向き合う人々「同士」が「一緒に」活動することの意義を説き、ともにする活動にいざなうのであり、「自己変革」はその結果として参加者のうちに生じるかもしれないものであった。そうした検討の結果、この論文は肺がん患者がいまでも直面せねばならない不安や孤独の存在を指摘し、その様態や要因の解明を今後の課題とした。

今後に向けて

これまでにグループOおよびJ会のメンバー18名にインタビューしてきたが、そのライフストーリーを記述し、発表したのは2名についてでしかない。今後はそれ以外の協力者の語りの検討に注力し、論文化を目指したい。

くわえて、文献等の調査にもとづき、患者主導治験問題にまつわる肺がん患者たちの活動を整理・発表したい。肺がんの一部は、その増殖の原因となる遺伝子変異が突き止められている。なかでもEGFR遺伝子変異はもっとも多く、肺がん患者に見つかり、全体の3分の1の肺がん患者がこの遺伝子変異を持つとされる。そうした種類の肺がんを用いられる分子標的薬ゲフィニチブの保険適用をめぐり、グループOおよびJ会は2018年より患者主導治験の実現に向けて活動してきた。その経緯を追い、そうした活動が〈肺がんIV期〉を生きる個々の患者におよぼす影響を検討することで、肺がん患者たちが患者会活動に取り組む要因の一端は詳らかになる。今後はその作業に取り組むことで、患者たちの語りの解釈とそのライフストーリーの記述をより深く掘り下げたものとする。

【参考文献】

Frank, Arthur W., 1995, *The Wounded Storyteller*, The University of Chicago Press. (=2002, 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』ゆみる出版.)

橋本文子・樫田美雄, 1999, 「ライフコースとセルフヘルプグループ——あけぼの会(乳ガン患者のセルフヘルプグループ) T支部幹部へのインタビュー調査から」『徳島大学社会科学研究』(12): 1-41.

本郷正武, 2010, 「医療をめぐる社会運動」中川輝彦・黒田浩一郎編著『よくわかる医療社会学』160-3.

小倉康嗣, 2013, 「ライフストーリー」藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー——新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社, 96-103.

小俣智子, 1998, 「この癒しの場で、風になりたい——『(財)がんの子供を守る会』石川到覚・久保紘明編、『セルフヘルプ・グループ活動の実際——当事者・家族のインタビューから』中央法規出版: 106-19

高橋都, 1998, 「だって、みんな生きていってるじゃないですか——『どんぐりの会(がん患者とその家族の会)』石川到覚・久保紘明編、『セルフヘルプ・グループ活動の実際——当事者・家族のインタビューから』中央法規出版: 2-19.

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

該当なし

② 図書

該当なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

該当なし

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

・学会等発表

齋藤公子「2010年代後半に〈肺がんIV期〉を生きるとはいかなることか——私の研究のこれまでとこれから」(口頭発表)

第4回難病遺伝研究会 (2019年5月29日、立教大学池袋キャンパス)

・学会等発表

齋藤公子「受動喫煙と肺がん患者——彼ら彼女らはいかなる影響を被っているか」(口頭発表)

第92回日本社会学会大会 (2019年10月6日、東京女子大学)

・学会等発表

齋藤公子「肺がん患者たちの集団はいかなる活動を展開しているか——「アドボカシー活動」を中心として」(口頭発表)

立教大学社会福祉研究所 2019年度第2回研究例会 (2019年11月6日、立教大学池袋キャンパス)

以上